令和５年度　第２回北海道立文学館運営評価委員会

開催日時　令和６年３月 14 日(木) 10 時 00 分～11 時 30 分

開催場所　北海道立文学館　地階講堂

Ⅰ　次第

１　主催者挨拶

２　議題

(1)　令和６年度展覧会事業計画（案）について

(2)　令和６年度教育普及事業計画（案）について

Ⅱ　出席委員

（敬称略；アイウエオ順）

氏　　名	所　　属　　等
東谷　一彦	【学識経験者】 札幌国際大学短期大学部教授
大澤　隆義	【地域関係者】 中島公園管理事務所長（中島公園地域コミュニティ推進協議会　事務局長）
辰巳奈優美	【利用者】 公益財団法人）北海道文学館賛助会員（俳人協会北海道支部　事務局長）
渡辺　俊之	【社会教育関係者】 公益財団法人北海道生涯学習協会　専務理事
渡部　浩士	【学校教育関係者】 学校法人聖公会北海道学園　認定こども園聖ミカエル幼稚園教頭

Ⅲ　委員からの意見等

委員）

本年度の左川ちか展を私も見せていただきました。北海道新聞で大きく記事にもなっていたのはいいですね。私も左川ちかを全然知らなかったのですが、あのような記事を見ると足を運ぶことに繋がると思います。ただ残念ながら、今は新聞を読まない人が増えているので、若い人たちに向けた広報については、こういったいろんな企画を、新聞ばかりだけではなく何らかの方法でとにかく広報活動をどんどん行っていただければと思います。

事務局）

その広報については私どもも一番苦労するところでして、特別展は北海道新聞社さんとの共催で開催して広報をお願いしているものの、回数などの制限もあり、昨年度までは北海道新聞は夕

刊がありましたので広報は主に夕刊でしたが、今は朝刊だけですので朝刊に広告を出していて、加えて当館に取材に来てもらい、大きく記事にしていただいてもいます。できるだけ記事にしてもらえるよう工夫しながら取り組んでいます。そのほか「さっぽろ10区(トーク)」ですとかいろんな情報媒体にお願いしているところです。

委員）

北海道新聞で取り上げてもらえると、やはりある程度影響力がありますし、あといろいろな媒体がありますから、自分自身はスマホを使っていませんが、色々な方法を使って広報活動がすすむことを期待しております。

事務局）

フェイスブックで月に7、8回ほど情報を発信しているところです。

当館のホームページには、そのフェイスブックの画面が出てきます。しかしながら、当館の利用者は高齢の方が多いのでネットを見ていただけるのも少ないと思われます。その部分は新聞などで補いながら広報して行きたいと思います。

委員）

ここは道立施設ですから、道立の高校などにどんどん発信していただけると良いと思います。

委員）

広報についてですが、この文学館自体を知らないというか、中島公園内を歩いていてこの建物は何だろうということが結構あると思います。とても工夫されて、リモートミュージアムとかあるものの、見るという気持ちになるということがなかなか難しいですし、興味を持ってもらうのも難しいですので、やはりここに足を運んでもらうのが一番いいと思います。子どもたちも参加できる「文学館まつり」などの催し物ですとか、若い人たち向けに短歌を募集して、発信していくと若い人たちに繋がると思います。もうすでに一生懸命工夫されていると思いますが。本当に盛りだくさんの計画で、学芸員の方々のご苦労を思うと、これら全部を見ないともったいないという気持ちになります。来年度の展示の中で、個人的には絵本作家の降矢ななさんは、自分の子どもたちに何百回も読み聞かせた本です。諳んじれるくらい、とっても楽しませていただいた絵本です。この展示はたくさん観に来てくださるのではないかと感じます。

また、中島公園内に看板を設置できないものでしょうか。地下鉄の出入り口に文学館への案内看板があると気づいてもらえると思いますが。

事務局）

公園内の看板については、公園管理と関係しますが、景観などの問題もあり、単独ではなかなか難しい状況です。地下鉄出入り口を出てから途中に、広告みたいなものを単独で立てられればいいとは思うのですが、うちの敷地外なのでそうもいかないところです。

委員）

ご説明を伺うと、いつも大変工夫されていて、本当に素晴らしいと頭が下がる思いです。先ほどから話題になっていますが、若い客層を増やし、リピーターも増やしていくことが必要だと思います。私どもの年代ですとこういう雰囲気、テーマが興味深くて足を運びたくなるのですが、若い人はなかなか、この静かな雰囲気に慣れていなくて、退屈に感じる部分もあることと思います。一度来てこの雰囲気の良さとか内容の濃さを味わっていくとリピーターとなってくれると考えますと、観覧料の親子割引のような、大人といっしょに来てみて、ここに慣れてもらうのがいいことだと思います。小中学校への働きかけを更に進めていただけるとありがたいと思います。北海道は広いですけれども、道内各地の小規模校で札幌に修学旅行や、宿泊学習で見学に入る学校もあると思います。大きな学校ですとここ文学館に一学年全部の児童生徒が入るのは厳しいと思いますが、小規模校であれば一学年20～30人で、そういった学校にいろんなご案内を発信して、立ち寄っていただくような企画もいいかと思います。例えば教科書に出てくるような文学作品を展示している時期に、来ていただいて、授業でも取り上げている作品の現物や原画を見てもらうとか、作者の生い立ちですとか、生きた教材として目にする機会があれば、とても子どもたちが興味を引かれて、今度は親と来てみようかなということもあるかもしれないのでご一考いただければと思います。

事務局）

昨年の特別展での「スーホの白い馬」は小学校の教科書で取り上げられていますので、そういったタイミングの時に小規模校などへご案内するなどできればと思います。

事務局）

ありがとうございます、私どももできるだけマンネリ化しないように工夫しながら、少しでも来館者が増えるように引き続き取り組んで参りたいと思いますので今後ともよろしくお願いいたします。